

博士學位論文審査要旨

2018年1月11日

論文題目： カルナップ『世界の論理的構築』における「相互主観性」の問題

学位申請者： 小川 雄

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 新 茂之

副査： 文化情報学研究科 教授 下嶋 篤

副査： 文学研究科 教授 中川 明才

要 旨：

本論文の焦点は、論理的経験主義という考えかたの道すじを敷いたルドルフ・カルナップの名著『世界の論理的構築』（1928年）にある。本論文は、その精緻な読解をとおして、客観性を備えた知識の基底に、カルナップの言う「相互主観性」を置き、その要諦を浮きぼりにしようとしている。カルナップは、ものを知る働きとしての認知の端緒に経験を据える。カルナップは、それを基本的体験と呼ぶ。とはいえ、本論文が指摘するように、具体的な経験は、特殊であり個別的であって、私秘的な領域にあるので、主観的である。だから、認知にかんしては、つぎのような問題が浮上してくる。すなわち、どのようにして主観的な契機から客観性が産生するのか、と。本論文の主題は、経験主義を貫いて、この課題に取りくむところにある。このように、本論文は、「相互主観性」についてカルナップが提起している視座を解析し、基本的体験から知識を形づくるという構成の論理的な構造を解明して、そこに客観性の土台を求めようとしている。

本論文の考察に拠れば、基本的体験の内蔵する感覚的性質の実相は、生き生きとした還元不可能な内実にあるのではない。一つのまとまりとして成立する経験は、反射性、対称性、推移性という形式的な関係性に依拠して集合的に生成する構成体であり、赤いとか、心地よいとか、冷たいとかといったことばは、それを象徴しているにすぎない。本論文の立論に準拠すれば、カルナップは、異なる主観が認知にかんして一致できるという可能性を、論理的な関係性の数学的な見地から捕捉している。カルナップにあっては、二つの主観がそれぞれの主観的な内実に一对一の対応づけに依ってたがいに秩序を与えるのに成功したときに「相互主観性」が現れる。つまり、本論文は、複数の主観性の形式的な論理的構造化に客観性を見ようとしているのである。

本論文は、『世界の論理的構築』をめぐって従前の研究者たちが打ちだしてきた見解も視野に納め、その問題点を指摘しながら、「相互主観性」を『世界の論理的構築』の主眼として明らかにする、という本研究の独自性を露わにしている。確かに、本論文が標的にしている従来の研究の、いっそう精緻な批判的検討は、必要になる。論述に粗さが残っているところもある。しかしながら、本論文は、これまでの研究では十分な光が当たっていなかった『世界の論理的構築』の重要な局面を炙りだしている。よって、本論文は、博士（哲学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2018年1月11日

論文題目： カルナップ『世界の論理的構築』における「相互主観性」の問題

学位申請者： 小川 雄

審査委員：

主 査： 文学研究科 教授 新 茂之

副 査： 文化情報学研究科 教授 下嶋 篤

副 査： 文学研究科 教授 中川 明才

要 旨：

上記審査委員3名は、2018年1月11日、午後5時から約2時間にわたり、夢告館1階会議室において、学位申請者にたいして口頭試問を行なった。

学位申請者は、各審査委員からの質疑に対して、提出論文にかんする哲学の専門的な知識はもとより、論理学をはじめ、関連する諸分野の主題とか問題とかについても、的確かつ詳細な応答を行なった。その結果、本論文の学術的価値と学力の水準の高さがともに証明された。

口頭試問のまえに行なった語学（英語・独語）試験においても、十分な語学力を備えていることが確認された。

よって、本論文にかんする総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： カルナップ『世界の論理的構築』における「相互主観性」の問題

氏 名： 小川 雄

要 旨：

本論の目的は、カルナップ(Rudolf Carnap, 1891-1970)の主著『世界の論理的構築』(*Der logische Aufbau der Welt*, 1928)に照準を絞り、認知を「構成」とするカルナップの見解を精査して、なぜカルナップがわたしたちの認知にかんして「相互主観性」を際立たせているのか、その理由を解明するところにある。

C.I.ルイスやクワインは、カルナップの『世界の論理的構築』に対して、知識の本質を無媒介的な経験に置く発想であるとか(C. I. Lewis, “Experience and Meaning,” 1933)、ヒューム以来の急進的な経験主義であるとか(W.V. Quine, “Epistemology Naturalized,” 1969)と述べて、カルナップを基礎づけ主義者とする描像を与えてきた。すなわち、こうした理解のもとでは、『世界の論理的構築』のカルナップは、わたしたちの経験の特質を私秘性に見てとり、その主観的な性質を知識の確実性の源泉として特定しながら、そのような確実な経験に科学的な知識を根拠づけようとしている。しかし、近年になって、『世界の論理的構築』を当時の時代状況に即して読み解く研究者たちの努力によって、このような見方は、説得力を失いつつある。たとえば、マイケル・フリードマンは、カルナップをイギリス経験論の系譜ではなく、むしろ、新カント派の問題圏に位置づけようとしている。すなわち、この見立てに従えば、カルナップのもくろみは、わたしたちの手元には個人的な体験しかないにもかかわらず、なぜ、わたしたちは認知的な営為のなかで客観的な知識を獲得できているのか、という問いに応答するところにある(Michael Friedman, “Carnap’s *Aufbau* Reconsidered” 1987)。言い換えれば、フリードマンが理解しているカルナップは、「客観的な世界」の樹立を志向している。実際、『世界の論理的構築』でカルナップが立論しているのは、つぎのような主張である。すなわち、わたしたちの認知を「構成」的な営みとして捉えれば、わたしたちが主観的な体験という出発点から始めて「あらゆる主観にとって同じである」ような「客観的な世界」に到達できるまでの道筋を描き出すことができる、と。だから、カルナップの『世界の論理的構築』は、フリードマンが申し立てているように、たしかに、認知の出発点が抱える主観性とその終点で確認できる客観性とのあいだにある溝を、「構成」という視座から埋めようとしている。とはいうものの、わたしたちは、依然としてこう問える。カルナップは、そのような架橋をとおして、いったいなにを訴えようとしているのであろうか、と。あるいは、なぜ、カルナップは、『世界の論理的構築』のなかで主観性から客観性への移行という問題に焦点を定めなければならなかったのか、と。本論は、この問いかけにたいして、客観性の本性を「相互主観性」として同定するカルナップの洞察から迫りたい。すなわち、カルナップの言う「客観的な世界」は、わたしたちの外側にある絶対的な実体ではなく、むしろ、わたしたちそのそれぞれがたがいのあいだに作り出している、合意のためのひとつの結節点である。このような視角からすれば、本論の主題はこうである。カルナップは、認知を「構成」として把握する見地に立ちながら、わたしたちの認知の下に横たわっている「相互主観的」な圏域を浮かび上がらせようとしているけれども、カルナップのその企ての真意は、果たしてどこにあるのであろうか、と。

その問いに答えるために、本論は、まず、『世界の論理的構築』を紐解き、そこで打ち出しているカルナップの基本的な枠組みを、認知にかんする主観的な「構成」説として特徴づける。この

考え方は、一見したところでは、認知的な対象はわたしたちじしんが「産出」しているという、いわゆる観念論であるように思える。しかしながら、「哲学における疑似問題」(“Scheinprobleme in der Philosophie,” 1928) という論考のなかのカルナップの言明に従えば、实在論者と観念論者の論争は、「不毛」である。だから、認知にかんするカルナップの考え方は、实在論とか観念論とかといった伝統的な哲学の枠組みとは異なる観点から捉えなければならない。すると、つぎに浮かび上がってくるのは、くだんの論争を「不毛」とする論拠の解明である。その過程をとおして第1章が露にするのは、言明の「意味」にかんするカルナップのつぎのような理解である。すなわち、カルナップにあっては、わたしたちのあいだで相互的な一致が成立する言明が「有意味」である、と。

カルナップも認めているように、わたしたちの認知の発端は私秘的な体験である。とはいっても、カルナップは、その特質を、クワインが指摘していたような、絶対的な明証性としては捉えていない。カルナップに従えば、体験の私秘性は、むしろ、認知的な空虚性を意味している。言い換えれば、所与としての体験は、それ自体では、わたしたちがほかの主観に伝達できる情報をなにも備えていない。第2章のねらいは、カルナップのこのような視点に則りながら、そのような体験から、どのようにして、さまざまな感覚が生じてくるのかを明らかにする。カルナップによれば、そのための鍵となるのは、「関係の記述」に基づく「関連付けと比較」である。とはいえ、カルナップのこのような枠組みは、わたしたちにどのような情報も開示しないはずの体験にさまざまな局面があることをすでに前提してしまっているように思える。この反論に応答するために、カルナップの言説に依拠しながら、関係を形式的に把握する視座を「構造」として析出させる。

第2章の議論では、体験から「感覚の質」をどのように「構成」するのかという問題に取り組んだ。しかし、わたしたちは、感覚的な情報を獲得しているだけではなく、そうした情報を駆使して、ほかのひとのこころのありようも捉えている。そこで、第3章は、カルナップの枠組みのなかで「ほかのひとの心理的なもの」にかんする認知がどのようにして可能であるのかを問う。その探索の結果、わたしたちのそのような認知を成立させているのは、ほかのひとの外形的な様子からみずからの感情にかんする表象を出力する、「表出関係」である。「表出関係」のあり方は、わたしたちひとりひとりで異なっている。すると、異なる主観のあいだでは、「ほかのひとの心理的なもの」にかんする理解は一致しないはずである。しかし、カルナップは、たとえば、あるひとが喜んでいるかどうかにかんして、わたしたちは一致に至ると確言する。その理由を探るために、「ほかのひとの心理的なもの」にかんする認知の始まりに立ち返りながら、カルナップがそこで導入している、「世界点」という装置の認知的な意義を明らかにする。その考察をとおして、「世界点」が一对一の対応関係の保証として機能している点を際立たせながら、二人の主観がなぜ同じ事物を見ていると言えるのか、その理由を開示する。

第3章で確認したように、「ほかのひとの心理的なもの」を認知するための「表出関係」は、異なる主観どうしではかならずしも一致しない。しかし、カルナップは、物理学が数学的に固めた自然法則には「ほかのあらゆる主観にも通用する妥当性」があると主張している。この言説に従って、第4章では、カルナップが『世界の論理的構築』で描き出している、「物理学的な世界」のありようを明晰にし、その領域をカルナップの言う「客観的な世界」として同定する。それでは、わたしたちは自然法則をどのようにして獲得しているのであろうか。カルナップによれば、わたしたちは、手元にある経験に適合する微分方程式を自然法則として探っている。しかし、その探索は、わたしたちのある「感覚の質」に対してそれに合致する「数的な構造」が無数にあるという困難に直面する。カルナップは、このような困難に対して、「もっとも単純であることの要求」から応答しようとしている。とはいえ、こうしたカルナップの枠組みには、つぎのような疑念を提起できる。「知覚的な世界」には「物理学の量的な方法では捉えられない特質」があるのではないのか、と。もし、このような疑念が当たっていたとしたら、わたしたちは、「知覚的な世界」を理解するにあたって、物理学を援用するのではなく、当の世界に踏みとどまらなければならない。カルナップはこのような反論に対してどのように応答す

るのであろうか。カルナップの言説に則りながら、わたしたちの温かさの感覚を解析し、わたしたちの知覚の機能を、形式的な関係を「現象の秩序」として把握するところに求める。このような視座に立てば、物理学と知覚を引き離して考える必要はない。というのも、カルナップによれば、知覚が捉えている秩序を、物理学は「数で名指している」からである。すると、「数学的に機能している物理学は知覚可能な自然の質を量に置き換えて、それによって、出来事の本質的な局面が喪失する」という冒頭の批判に対しては、こう応答できる。わたしたちが熱さとか冷たさとかとして理解しているのは、それらが現れてくるときの知覚的過程にある関係的な違いであって、物理学は、質としてのそのような構造的差異を、数的連関に基づいて、いわば「量的な方法」で精密に掴みとろうとしているのである、と。さいごに、これまで獲得した見地から、「知覚的な世界」と「物理学的な世界」との同質性を「相互主観性」の観点から主張した。